

姫野カオルコ『受難』論

— フランチェス子の受難が示す恋愛のあり方 —

青木 紅瑠美

一 はじめに

本研究は、姫野カオルコ『受難』で投げかけられている、世間一般（一）の中での恋愛観への疑問を明らかにし、『受難』の提示する「恋愛」の本質を追求するものである。斉藤美奈子は、姫野文学はいつもある種の「異化効果」をもって描かれてきており、読んでみると、今まで自分が読んできた恋愛小説や青春小説と呼ばれるものはなんだったのかという感覚に捉われる（二）、と述べている。姫野の書く小説は、「恋愛小説」（三）ではあるものの、私たちが日頃何気なく使っている恋愛という言葉をもっぱら「異化」（四）して書かれているというのが、姫野のどの作品を読んでも共通して言えることである。『受難』は、「モテる」ということはどういふことか、価値のある女であるためにはどうあるべきかといった、多くの人々が一度は直面する問題を浮かび上がらせる。そしてこれらの問題の根本にある現代の恋愛に対する姫野

からの哲学的な問いが、この『受難』に散りばめられていることに気づく。『受難』において恋愛がどのように「異化」して描かれ、恋愛におけるどのような問題が浮かび上がっているのかを探ることで、『受難』の恋愛小説的価値を追求するのが、本研究の目的である。

二 聖書との関連性

本作品のタイトルになっている「受難」という言葉は、イエス・キリストが十字架で刑を受けた苦悩のことを指す神学用語である。また、『受難』には、聖書の詩が引用されている部分がいくつかある。主人公フランチェス子と作者である姫野がキリスト教を信仰していたことも含めて、作者は意図的に聖書（キリスト教）を作品に取り入れていると言えよう。実はこのことが『受難』の恋愛小説的価値に関わっているのだ。聖書を取り入れた姫野の意図とはなんだろうか。

『受難』で聖書を引用している箇所は全部で四ヶ所である。その四ヶ所は、聖書のなかでの意味を基盤として引用しているものと、全く違った意味で引用しているものに分けられる。まず、聖書の意味を基盤として用いている箇所は、二ヶ所ある。例えば次の部分である。

もろもろの君はゆえなく私をしえたげます。しかしわが心はみことばを畏れます。私は大いなる獲物を得た者のようにあなたのみことばをよるこびます。私は偽りを憎み、忌み嫌います。

しかしあなたの掟を愛しています。私はあなたの正しい掟のゆえに一日に七たびあなたをほめたたえます。あなたの掟を愛する者には大いなる平安がありますように。(本文 六一頁 三行 目)(五)

この詩は、『旧約聖書』詩篇一一九にある詩の一節である。この詩は、詩篇中最も長いものであり、イスラエルの律法を推奨したものとされるとされる。この詩の作者は、ある試練の際に、迫害の状況にあるものの、真剣に神の道に歩もうと志していた者だった。自らを慰めるものは神の掟のみであることを固く信じ、神の助けを祈り求めていた。そのことから、この詩は信仰心を励ます詩であるといわれている(六)。『受難』の中でこの詩は、「さびしい」と言ったフランチェス子に対して、古賀さんがお前は傲慢であると罵声を浴びせ、フランチェス子が自らを戒める場面でフランチェス子が唱えた詩である。フランチェス子は、この詩を唱えることで、神への信仰心を乱してしまった自分を

励ましているのだ。ここでは、聖書と『受難』との間に「信仰心を励ます」という共通点が見られる。聖書の中でこの意味を基盤としていると言えよう。

次に、本来の意味とは違う意味で引用している箇所について考察しよう。

わたしの魂が痛み わたしの心が刺されたとき
わたしは愚かで悟りがなく あなたに対しては
獣のようであった けれどもわたしは常にあなたと共にあり あなたはわたしの右の手を保たれる(本文 一六三頁 二行目)

この詩は、旧約聖書詩篇第七三篇「信仰の試練」からの引用である。これは、もともとフランチェス子が友人であるウイズ美に送った詩であったが、ウイズ美はこの詩を、自らが恋したクスに、自分の気持ちはこの詩の通りだと思い、送った。元の詩の意味は、悪人の繁栄によつて信仰者の信仰は試みを受けるが、悪人が栄えるのは夢を見ているときのようなものであって、目を覚ましたならばすべてが消えてなくなる。そして悪人からの辱めにあわずに、神より賜る栄光にあずかることが出来る。というものである(七)。『受難』では、この詩をクスへの思いを告白するために送っているが、本来の詩の意味とはかけ離れている。ここで

は、姫野が詩に新たな意味付けを行っていると見えう。

聖書を本来の意味と違う意味で用いている部分二か所を考察すると、ある共通点が見られる。それは、どちらも「愛」に関する場面で使われているということとである。ウイズ美がクスへの思いを告白するために詩を送る場面、そしてフランチェス子が古賀さんに事後詩を読む場面。どちらの場面にも、「恋愛」が関わってくるのだ。「恋愛」について語るうとする際に、聖書での意味とは違う意味で聖書が引用されるのである。このことから、姫野は、聖書を基盤としてはいるものの、その聖書から、「恋愛」に新たな意味付けを行おうとしているといえる。では、聖書において、「恋愛」とはどのように捉えられているか。

キリスト教は肉欲を罪悪視していたため、キリスト教の中では、「恋愛」と呼ぶにふさわしいのは、プラトニックで精神性の高い「恋愛」のみであった。そのため、キリスト教において「愛」と「性」は、身体と精神という二つに分離して考えられている。けれども、聖書でセックス自体は禁止されているわけではない。セックスは男女の魂の融合であると捉えられていて、むしろ神聖なものとして考えられていた。ただし

セックスによって生じた快感や欲びといったものは決して神聖ではないとされ、セックスというのはあくまで子孫を繁栄させるための行為であり、その場合においてのみセックスは神聖なものとされるといえる。聖書での捉え方である。姫野は、聖書を作品に取り入れることで、聖書に表れてくる愛の捉え方、たとえば神の愛であるとか、恋愛は「性」を排除して神聖なものであるべきだという考え方をアンチテーゼとし、精神的な愛のみを恋愛と認める、純愛主義を批判しようとしているのだ。

聖書をはじめとして『受難』には様々なインタテクストがあるが、それらはどれもユーモラスに描かれている。登場人物たちの会話が非常に滑稽であったり、また数々のインタテクストをパロディとして見事に取り入れており、読者は思わず笑ってしまうことだろう。例えば、フランチェス子は、陰部に人面瘡ができていただけではなく、数々の特殊能力がある。それは、男性器を萎れさせたり、パイヴを折ったり、さらには頭髪を消し去ったりする能力である。一読すると、なんとも笑える設定である。けれども、この能力は、ある一つのことを指し示しているのだ。フランチェス子は、「外見のつくりの問題ではなく」、「人を引きつけるもの、とりわけ

男性を引きつけるものがまったく欠落」しているために、以前所屬していたモデル事務所の男性たちに、「いい子」なのに「チンチンが懺悔しはじめる（八）」と言われてしまう。特殊能力が開花する前から、彼女は男性を萎えさせていた。フランチェス子は「いい子」なのにも関わらず、性的魅力がないからと否定されるのである。そして特殊能力が開花し、彼女は男性を自ら遠ざけるようにさえなる。触れれば、男性器を萎えさせてしまうからだ。本来ならば、たとえ体に触れられなくても、「純愛」とは、体の関係を排除するのだから、問題はないはずである。けれども、男性たちはフランチェス子に近づかない。それは、フランチェス子の身体に魅力がないからである。男性を誘惑させることが出来なければ、女性として価値がない、そんな認識が恋愛の根底にはある。体の価値と、人格の価値が同一視されるのだ。体に価値のある女性は、人格が優れている女性にも勝るのか。そんな、恋愛に対する世の中の認識は間違っているのではないか。思わず笑ってしまうような設定の裏側には、こんな悲しみが隠れている。米原万里は、『受難』を「滑稽さと悲しみが混然一体となった文体」と述べている。『受難』における笑いの裏側には、このような「悲しみ」も同時に込められているのである。笑いの裏側にあるその「悲しみ」

の中身こそが、私たちが「恋愛」に直面した時の苦しみであったり、悩みであるのだ。「恋愛」に向き合った時、フランチェス子が自分のことを男に求められることのない「ダメ女」だと悩んだり、ウイズ美が、自らが処女でないため愛する人に体を捧げられないと悩んだりするように、私たちは「恋愛」に関して悩み、苦しむのである。けれども同時に、『受難』は、そういった悩みを洗い流してくれるかのように、私たちを笑わせてくれるのである。作品内には、一般的に理想とされている「恋愛」に対する違和感や不満が確かに表れている。けれども、私たちの悲しみや悩みといったもの、それらをすべて軽いものとして笑い飛ばしてくれるかのように、姫野はユーモラスに描くのである。陰部に人面瘡が出来てしまうという奇想天外な設定や、聖書を含む多様なインターテキストを用いたパロディによる抱腹絶倒な笑いの裏側には、姫野の現代の「恋愛」のあり方への悲しみ、さらに言えば、その悲しみを抱かせてしまう「恋愛」への痛烈な批判が込められていると言えよう。

三 明治・大正・昭和における恋愛のあり方

それでは、聖書などを用いて姫野が主張しようとしている恋愛のあり方とはいったい何なのだろうか。そのこ

とに迫る前に、日本に恋愛という概念が生まれた明治から現代に至るまで、恋愛は日本でどのように理解されてきたのかを捉え、日本人の恋愛観に迫っていこう。

恋愛という言葉は、明治時代に成立した「Love」の翻訳語である。翻訳語としての恋愛をどう解釈するかということは、多くの論者たちが様々な立場から論じてきている。姫野カオルコもその論者の中の一人である。例えば坪内逍遙は、男女の間の愛を指す「Love」という言葉が日本に入ってきてから、早い段階でこの「ラブ」という言葉を文学の世界に取り入れた。また坪内は、その「愛」をさらに三段階に分けた。上の恋、中の恋、そして下の恋と分け、相手の人格や性格といった内面に惹かれるものが高級な、すなわち上の恋であり、精神的な関係を理想とした。しかし、この時は、まだ「Love」の翻訳語が「色」や「愛」、「恋」というように定まっていなかった。「Love」とは精神的なつながりを指すのか、それとも肉体的なつながりを指すのか、人々の間ではつきりと区別されていなかったのである。

そもそも明治時代半ばまで、恋愛というものは、「愛」という言葉が仏教的な意味における執着する・貪るといふような意味合いを持っていたがために、あまりいい印象を持たれていなかった(九)。しかし、「愛」という言

葉が肯定的な意味を持つようになったのは、聖書の翻訳が契機だったのである。(一〇)。キリスト教の普及により、「Love」という概念が、明治後半になると精神的な面を重んじるようになってくる。もともと日本では、『古事記』における、イザナミ・イザナギによる性的な営みによって国が生まれたという神話があるように、性的営みこそが神々の世界に近づくことが出来る手段とされ、神聖なものとされていた(一一)。けれどもキリスト教はこの日本の観念を逆転させ、性は「獣欲」であるとしたのである。「恋愛」を神聖なものとする考えを打ち出した人物の一人として、北村透谷が挙げられる。透谷は、動物的本能である肉欲と、そして精神的なものである恋愛をはつきりと区別しようと、恋愛の神聖さを主張した。恋愛をしてこそ人の世というものが始まり、その鍵によって人生の扉を開くことが出来て、人生の真の姿を知ることが出来る。恋愛とはそれほど人生に重要なのだと透谷は主張した(一二)。この主張を含め、明治以降、恋愛という言葉は、性交とは異なる、むしろそれを排除した精神的男女関係、プラトニックな関係を重視する表現として使われ始めた。そのために、明治時代には、プラトニック・ラブこそが正しい恋愛であるとされ、明治の進歩的な青年の色事からの決別と、性欲という言葉の誕生を

もたらした(一三)と言われているほどである。そのため、処女はプラトニック・ラブの崇高な実践者であるとされた。透谷ら、明治の新しい「恋愛」を推進してきた人々は、「好色」が必然的に含んでいた肉体関係を排除し、精神的な関係こそが進歩的で文明的な愛であると説いたのであった。そのため、明治時代の愛のとらえ方は、精神的「愛」は文明的だが、「性欲」は野蛮であるという考えであった。けれども、恋愛賛美が進む一方で、恋愛軽蔑の風潮も生まれてきた。現実の「真」を重んじる自然主義文学は、醜い性欲、肉欲に眼をふさいだ恋愛観を軽蔑し、(一五)透谷的な恋愛観を欺瞞的なものであるとしたのだった(一六)。

大正時代になると、ふたたび自然主義文学の恋愛蔑視の考えに対して、恋愛賛美が復活する。その代表的な人物が、厨川白村である。彼は東京朝日新聞で『近代の恋愛観』という恋愛賛美を主張した(一七)。同じ恋愛賛美でも、透谷と白村の考えは違っていた。それは、肉欲と恋愛との関係である。厨川は、性欲はあくまで深く恋愛のなかに根差してはいるが、やがてそれは恋愛となつて美しく咲き、そのときに性欲はすでに根元に沈んでいる、といった考えを持っていた(一八)。そして、彼は恋愛を人間関係だけでなく社会関係においても広く見ようとし、

結婚というところにたどりつく。当時見合い結婚が根強かつた中で、「恋愛」から出発しない結婚は偽である、と主張したのである。

昭和初期になると、再び恋愛軽蔑の考えが出てくる。それは、女性の立場からの恋愛軽蔑であった。このころ、「職業婦人」という言葉が生まれるほど職業を持つて社会に進出する女性が増えた。明治時代にもいた、工場で働く女工としてではなく、オフィス・ガールの出現であった。職業婦人の出現は、女性たちに独立感を与えた。

今までは男性に庇護してもらう立場であった女性たちは、自分たちが男性の恋愛と対等でありたいと、新たな恋愛観を求めたのである(一九)。女性たちは対等という点で、男性は自分たちの純潔を問題視していないのだから、女性も同じであつて良い、処女礼讃は屈辱的だと考えていた。純潔賛美を不条理だとして打破し、解放しようという考えから、恋愛や性欲を神聖なものとみるということ、性を軽蔑し、性を含めての恋愛を軽蔑した(二〇)。また、結婚に対する考え方は、恋愛は恋愛、結婚は結婚というように割り切っており、恋愛の相手を結婚の相手と結びつけないとする新しい考え方が提示された。

しかし、戦争がはじまると、極端な恋愛軽蔑が現れ始める。恋愛弾圧が始まったのである。未婚の男女の恋愛

も、戦争のさなかで軽薄なものとされ、若い男女が夜の街を歩くだけで警察に風紀を乱すとして咎められる（二一）ほど、恋愛は禁止された。また、恋愛は駄目でも、娼婦たちによる性の発散は昂然とされていたことも、恋愛軽蔑を強めることとなった。そして敗戦。敗戦の混乱により、恋愛の解放よりも性の解放に世間は傾いた。性欲と恋愛が混ざり合い、性の頹廢が起こった（二二）のである。

戦争から七〇年たち、恋愛観についてももう新たな時代になつてゐる。それでは、現代の「恋愛」という言葉の捉え方とはどうであろうか。明治の考えとは違い、現代は、恋愛や愛という表現を使つてはいるものの、日本の若い男女の関係はかぎりなく色事的になつてゐる、と佐伯順子は著書『愛』と『性』の文化史』のなかで述べてゐる。昭和三十年代ごろまで、「純愛」とは対極の意味とされてゐた肉体関係が、「純愛」の許容範囲に含まれるようになってきたというのだ。けれども佐伯は、制度的な結婚や夫婦愛が衰退したとしても、「オンリー・ユー・フォーエヴァー（二三）」の理想は、根強く残つてゐると指摘する。たとえば佐伯は、恋人たちが指に嵌める指輪に着目した。現代の恋人たちの指輪は、かつてのように結婚や結婚という意味は持たず、交際してゐるといふ記

号でしかない、と指摘し、「交際の中に肉体関係がふくまれることが常識化した現代の若者の間では、むしろ、肉体関係を含むパートナーシップが従来よりも重くなつて」おり、だからこそ、今「恋愛」は重要なものとされ、「恋愛」自体が結婚と同等の意味にまでなつてきてゐるといえる、と佐伯は述べてゐる。また、指輪という、恋人がいる証を身に付けるということは、パートナーがいるということに価値があるというように社会では捉えられてゐるとも言えよう。

いま、私たちの周りには、雑誌やテレビドラマ、映画、流行歌や漫画など、様々な「恋愛」に関するメディアで溢れてゐる。私たちは、「恋愛」という言葉をごく当たり前に使つてゐる。しかし、当たり前に使つてはいるが、私たちは「恋愛」という概念自体の本質を理解しないまま、「恋愛」を理想化してはいるまいか。それはフランチェス子も例外ではない。フランチェス子は、王子が魔王に捕まつたお姫様を助けに行くという内容のゲームを作つてゐた。また、ある場面でフランチェス子は、女が泣いてゐるのに対して男が「おまえがそばにいてほしい。いつもおまえがそばにいてほしい」というドラマの中のお姫様を助けに行つたり、若い男が、自分にとって一

人しかいない女を求める。まさに自分にとつてたった一人の誰かと結びつく、恋愛の王道とも呼べる物語がフランチェス子の周りに溢れているのだ。このようないわゆる恋愛の王道は、私達のまわりにも溢れている。そして、

こうした恋愛の王道の物語の中で恋愛というものは理想化されていくのだ。現代の「恋愛」観は、「愛」と「性」、両方が当たり前のように一つにまとまって解釈されている。明治時代の恋愛が、精神的なつながりのみを指し、まさに純愛と呼んでいたのに対し、精神と肉体、その両方が合わさっても「純愛」と呼ぶのである。私たちは、「純愛」を理想の恋愛としながらも、「純愛」をプラトニック・ラブ的な意味で捉えてはおらず、肉体関係も含めた意味で「純愛」という言葉を使う。肉体関係も含めた意味でなった現代の恋愛においては、一対一、特定の相手と愛し合つてさえいれば、それは「純愛」なのである。現代の恋愛観は、まさに江戸時代の、恋愛における「性」を認めていた「色事」に近くなつてきているのかもしれない。

これまで日本における恋愛観の変遷を見てきたが、恋愛観の変化とともに「愛」と「性」をどのように捉えるか、という問題も同時に語られてきたことがわかる。姫野は、『受難』を通して、「愛」と「性」の問題を述べて

いるのである。

四 恋愛における「愛」と「性」

私たちの周りは、恋愛という言葉で溢れているということは先ほどから触れている。しかし、世間で語られるのは恋愛の中でも「愛」の方ばかりなのである。「性」は、避けられているのだ。性の話題やセックスはタブーとされているようである。その中で、注目したいのは「プラトニック・ラブ」という概念である。明治時代の頃から、日本では精神的「愛」は文明的だが、性欲は野蛮である、精神的な関係こそが進歩的で文明的な「愛」であるという考え方が「恋愛」について述べられてきた。恋愛至上主義の考えでは、「恋愛」において「プラトニック・ラブ」という概念が重要視される。では『受難』ではどうだろうか。実は、古賀さんとフランチェス子の関係は、限りなく精神的な愛、プラトニック・ラブなのである。

私、こんな女でしょ。どんな男の人も私には恋愛感情を抱かないのだし、こんな身体でしょ、性生活も営めないわ。だいたい私とセックスしたいと思う人がいないわ。だから、古賀さんと結婚するのいいと思うの。(本文 二〇〇頁 五行目)

自分とセックスしたいと考える男性などいないから、

セックスのある恋愛関係をフランチェス子は求めていないことがこの発言からわかる。次の文も見てみよう。

結婚するっていったって、古賀さんは人面瘡だから婚姻届を出すわけにもいかないし、べつになにも変わるわけではないのよ。ただ「うん」と古賀さんが、そんなたわいなきひとことを言ってくれば、それで落ちつくから（本文 二〇五頁 一三行目）

結婚したという証である「婚姻届」をフランチェス子はいらないという。古賀さんの返事だけあればいい、という彼女は、まさに古賀さんと精神的なつながりのみを求めていると言えよう。また、フランチェス子は、古賀さんにこのように伝える。

「なにも話さずにただ無難なことだけをおしゃべりしてセックスしているカップルより、私と古賀さんのほうが深くつきあっていると思うわ。」（本文 二一七頁 一四行目）

セックスをするより、話をした方がよほどいいと考えているのだ。フランチェス子は、プラトニック・ラブの実践者であると言えよう。さらにもう一つ、二人の恋愛がプラトニック・ラブであることを指し示すものが一つある。それが、フランチェス子と古賀さんによるキスである。明治時代においてキスは、日本の恋愛観の中でプ

ラトニック・ラブの象徴として考えられていた。キス、すなわち接吻という表現は、当時の日本人にとってはかなりの衝撃を与えた。日本における接吻は性的接触の一部と考えられていたが、西洋では、家族や友人同士のあいさつとしても使われるため、性的関係に繋がらない、親愛の情を表現する手段として、新たな地位が与えられることになったのだ（二四）。古賀さんとフランチェス子、二人の愛の始まりは、まさにプラトニック・ラブの象徴である接吻から始まる。一度目のフランチェス子による額へのキスで古賀さんは人面瘡から銅像へと変化する。そして二度目の唇へのキスで古賀さんは生身の人間となる。キスによりフランチェス子のもとに「王子様」が現れるのだ。

しかし物語の結末で、あれほどプラトニックな関係を保っていた二人はあっけなくそうした関係から脱することになるのである。愛と性は、二人にとって同等のものである。この結末には、「恋愛」において性は要らない、性と愛は別物であるという、プラトニック・ラブに対する姫野からの痛烈な批判が込められているのである。では、姫野はプラトニック・ラブを批判して、「恋愛」とはどのようなものであるべきだと主張しているのだろうか。恋愛と性（生殖）を無関係、別のものとして捉える

という恋愛至上主義による生殖軽視とみるのか、それとも恋愛の根源を生殖と捉えることで肉欲の昇華とみるのか。どちらも、何か大切なことを見失っているのではないだろうか。愛と性を全く同一視することはできないが、愛と性には重なり合うところもある。田中敏明は、現代では、愛と言う条件を整えばセックスを行ってもよいという若者が多数を占めると述べている(二五)。現代では、「恋愛」を「性」を満たすための手段という見方がされていることが多い。では『受難』で「性」はどのように捉えられているのだろうか。

聖書の引用や、物語の結末部分からわかることは、『受難』は、プラトニック・ラブであったり、性と愛を分ける考え方を、作品を通じて批判しようとしているということである。理想の恋愛だとか、純愛だとかに對する、痛烈な批判、さらには性的なものを何か悪いもの、いやらしいものとして見る風潮こそ間違っている、という主張が『受難』にはある。たとえば、古賀さんに、強迫され、しぶしぶ自慰を始めるという場面があるが、この場面でフランチェス子アダルトビデオを見る。けれど、フランチェス子の目には、男女がセックスをしているシーンが「いやらしい」とは映らない。アダルトビデオを見ていても、セックスに関する発言をするのではなく、

あくまでフランチェス子が言うのは、セックスをしている男女の関係、さらに言えば「愛」に関してなのである。これは、フランチェス子が、「愛」と「性」を同等のもの

として捉えていることの表れではないだろうか。それは、フランチェス子がクスに告白したときの場面にも表れている。フランチェス子は、ある飲み会で、クスの隣に座りたい、と思いつながら、何気ないふうに座ることが卑怯だと感じ、着席する前にクスに「私はクスさんが好きです。できればセックスしていただきたいと思います(二六)」と思いを告げる。この言葉はフランチェス子にとってクスへの愛の告白であった。フランチェス子は真剣に思いを告げたのにもかかわらず、クスを含む周りの人々は、この告白に絶句し、また笑うのだ。フランチェス子の告白の中の、どこの部分に人々は絶句し、笑ったのか。

それは「セックス」という言葉である。明治のころの、「愛」と「セックス」を分離して、恋愛を神聖なものとする時代とは違い、今は「愛」と「セックス」が一体化して語られるのにもかかわらず、「セックス」という単語を聞くと人々は戸惑うのだ。それは、「セックス」が「いやらしい」ものであるという考えが根底にあるからである。「セックス」は「愛」の一部なのである。「愛」を神聖なもの、純粋なものともみなすのなら、「セックス」も純

粹なものであると考えるべきなのである。にもかかわらず、「セックス」といった言葉をいやらしいと考えるのがフランチェス子の周囲では「当たり前」、あるいは「普通」なのである。この考えは、現代の私たちにもつながるであろう。

「いろいろな形の性愛があつて、それがふたりの間にありさえすれば、そのセックスはともピュアなものだと思ふの。」(前掲 一三〇項 一四行目)

フランチェス子は、二人の間に愛さえあれば、セックスは「ピュア」なものであると考えているのである。

「セックスを『あかし』や『手段』や『武器』にすることがセクハラだと思ふわ。」(前掲 二三一項 二行目)

現代では、プラトニック・ラヴが推奨されているわけではない。先に述べたように、むしろ体の関係を含めて「恋愛」は語られる。けれども、私たちのどこかにプラトニック・ラヴこそが美しいという感覚は残っていて、性的なものを表面に出すことを良しとしない。恥ずかしいもの、いやらしいものとする風潮がある。けれども、「愛」も「性」も、「恋愛」には欠かせないものである。セックスをすることは、恥ずかしいことでも、いやらしいことでもない。まぎれもない「愛」なのだ。もっとホ

ジティブに「セックス」という言葉を恋愛の中に取り入れるべきである、という主張が、『受難』にはある。『受難』は、日本における「恋愛」という概念を再び問い直し、新たな意味付けを行おうとしているのだ。これこそ、『受難』の恋愛小説的価値と言えよう。

五 おわりに

姫野カオルコ『受難』は、様々なインターテキストをパロディとして取り入れることで、恋愛を「異化」して描き、世間で一般的とされている恋愛観への違和感を浮き彫りにした。そして恋愛という概念自体を問い直して、新たな意味付けを行おうとしている点において、恋愛小説的価値があることが明らかになった。姫野は、フランチェス子のように恋愛をひたすら自分の中で理想化し続け、こんな恋愛私には絶対に出来ない、と悩んでいる人々に向けて、恋愛と「リラックスして気軽につきあうべし」(二七)を提示しているのである。

【注】

(一)この論文での「世間一般」の恋愛観とは、女性誌『受難』内でインターテキストとして出てくる『with』講談社、『MORE』(集英社)、『Non-no』(集英社)、『an-an』(マガジンハウス)や

テレビドラマといったメディアにおける恋愛観のことを指す。

(二) 斎藤美奈子『ツ・イ・ラ・ク』解説 角川書店 一

九九三年 五三三頁三行目

(三) この論文における「恋愛小説」とは、恋愛を主題とした小説のことを指すものとする。

(四) 「異化」とは、日ごろ慣れ親しんでいる現象に別の角度からの光をあてることで思いもよらなかった側面が浮かび上がるという意味。

(五) この論文において「本文」とは、姫野カオルコ『受難』文藝春秋 一九九七年四月を指す。

(六) 手塚儀一郎 浅野順一 左近義慈 山崎亨 松田明三郎

船水衛司『旧約聖書略解』日本基督教団出版社 一九八八

年一〇月 五九三〜五九四頁

(七) 同前 五六一頁

(八) 本文 五五頁一五行目

(九) 佐伯順子『色』と「愛」の比較文化史』岩波書店 一九九八年一月 八頁〜九頁

(十) 同前 一五頁

(一一) 同前 一四頁

(一二) 同前 一四頁〜一五頁

(一三) 高見順『現代の教養九 恋愛・性・家庭』「恋愛観はどう変わったか」筑摩書房 一九六七年 八九頁

(一四) 佐伯順子『「愛」と「性」の文化史』角川出版 二〇〇

八年一月 五三頁五行目

(一五) 前掲『現代の教養九 恋愛・性・家庭』九三頁

(一六) 同前 九二頁

(一七) 同前 九三頁

(一八) 同前 九四頁

(一九) 同前 九五頁

(二〇) 同前 九六頁

(二一) 同前 九六頁

(二二) 同前 九六頁

(二三) 前掲『「愛」と「性」の文化史』一〇八頁八行目「恋愛と結婚を一致させ、永遠の夫婦愛を誓うという、近代的な一夫一婦制を支える」理念を指す。

(二四) 佐伯順子『恋愛の起源—明治の愛を読み解く—』日本経済新聞社 二〇〇〇年二月 一三一頁

(二五) 田中敏明『性と愛の真理』福村出版株式会社 一九八八年十二月 二五頁

(二六) 本文 六三頁

(二七) 本文 二一八頁五行目

(あおき くるみ 上田第五中学校)